

みんなで育てる「たいしの子」vol.14

幼小中一貫教育だより

令和5年度の各学校園の取り組みを振り返って 『一人ひとりの良さが輝く魅力ある学校をめざして』

町立中学校

町立中学校の学校教育目標は、「太子の土壌に立ち、未来を見据え、自ら学び自ら動く生徒、一人ひとりの良さが輝く学校」です。学年運営、学級運営、授業、行事、部活動などの教育活動が、目標に繋がること、その先に幼小中で育む子ども像があることを教職員で意識して取り組みました。

「非認知能力の育成」を軸として、「何のために学校があるのか?」「この1年間どのような力を生徒につけていきたいのか?」「そのためには何を意識して取り組むべきなのか?」など、「学年ごとに生徒につけたい力」、「行事で生徒につけたい力」を生徒玄関や職員室に掲示しました。

コロナ禍で実施できなかった町立中学校の特色ある行事、例えば、文化祭での合唱コンクールや業間運動などを4年ぶりに再開することができました。文化祭での3年生学年合唱の「モルダウ」は、町立中学校の伝統として、引き継がれてきました。先輩の学年合唱の姿を見ていない3年生でしたが、みんなで一生懸命に歌う姿が素晴らしかったです。3年生の「協働する力」「挑む力」「伝える力」を1・2年生は観て感じ、これからも町立中学校の伝統として引き継がれていきます。

その他にも、全学年で宿泊行事を行っていることも特色の1つです。1年生で「貝塚宿泊学習」、2年生で「淡路合宿」、3年生で「修学旅行」をとおして、主体性など未来を生きる力を育んでいます。



非認知能力育成をめざして ～数値から見る2年目の取り組み～

町立山田小学校

町立山田小学校では、4～6年生の児童を対象に非認知能力に関するアンケートを各学期末に行っています。1・2学期末のアンケート結果と1月に行った学校診断アンケート（4・5・6年生児童対象）の結果と合わせて、令和5年度の考察をします。

非認知能力に対する児童の意識は、日頃の教職員からの声かけで、高まったと考えられます。また、1学期末に比べ、2学期末ではより一層児童はつけたい力を意識して取り組んだと考えられます。このことから、教職員からの児童に対する声かけ・働きかけが大切だとわかります。

1学期末、これからつけたい力として「伝える力」を挙げる児童が多くいました。2学期には、運動会や学習発表会、たてわり班活動や低・中学年での校外学習、5年生は社会見学や稲刈り体験から収穫祭、6年生は修学旅行もあり、学校行事がたくさんありました。児童が主体的に行動し、児童同士で意見やアイデアを交わす機会が多くありました。それらの活動をとおして、児童は目標に掲げていた「伝える力」に取り組めたという実感をもつことができたようです。

2学期の活動の中で、「伝える力」を意識し、自分の意見や考えを発信する仲間の姿を見て、周りの児童が触発されたのかもしれない。

1月に学校診断アンケートを4・5・6年生児童に行いました。児童の学校行事への満足度は高く、自分のがんばりを認めたり、意見を聞き入れてもらえるといった教職員との関係性が良好であることもわかります。令和6年度も児童が安心できる環境づくりを整え、児童が主体的に取り組める活動を行っていきたいと考えています。

*1学校生活を通して伸ばしたい力について先生から話を聞いたことはありますか?



*2学校生活を通してつけたい力についての話を聞いて、意識して伸ばしてみようと思いましたか?



*3学校生活において、一番がんばった(意識した)力は何ですか?(伝える力の回答割合)



*4これからの学校生活でつけたい力は何ですか?(伝える力の回答割合)



*5. 学校でする行事は楽しい



*6. 先生たちは私たちの意見をよく聞いてくれる



*7. 先生たちは学習で自分が努力したことを認めてくれる



■ 思う □ 少し思う

主体的・意欲的に遊ぶ子どもの育成をめざして

町立幼稚園

町立幼稚園では「友だちとの関わりの中で主体的・意欲的に遊ぶ子どもの育成をめざす」を研究主題として保育を行っています。令和5年度の取り組みを振り返り、園児の自己肯定感や自己効力感の向上、他者とのコミュニケーション能力の向上が見られました。また、自分の意思を持って目標に向かって取り組む力も育まれました。

「目標に向かって頑張るぞ!!」

園児は楽しく運動遊びに取り組む中で、粘り強くあきらめずに、さまざまなことに挑戦する力を付けました。遊びの内容によっては、忍耐力を培い、達成感を味わう経験もしました。これらの経験から園児は自己肯定感が高まり、新たな力が湧き、次への意欲へ繋がっている様子でした。

自分だけが目標を達成させれば良いのではなく、やり方を教える姿や励まし応援する姿、一緒に取り組む姿も見ることができ、そのことから相手を大切にすることが育っていることがわかりました。また、小中学生との交流では、お兄さんお姉さんに優しくしてもらえたことで、「自分も大きくなったら、あんなふうになりたい」という憧れの気持ちが育ち、クラスの友だちや年下のクラスの友だち、未就園児に対しても同じように優しく接する姿も見られました。



「メダカのお引越し大作戦!! (ビオトープづくり)」

濁った水のケースの中で泳ぐメダカの様子を見た園児は、「お家が汚くて可哀そう、大きくてきれいな所にお引越しさせてあげたいな」と、メダカを思う優しい気持ちからメダカの家づくりが始まりました。クラスから始まった活動でしたが、他クラスへ助けを求め、全園児総出のメダカの家づくりになりました。それでも園児だけでは難しくなり、家族の人にも手伝って頂き穴掘は完成したものの、穴を掘っただけでは水が抜けてしまい、たちまち困る場面に遭遇することになりました。今度は、専門家の人にも困りごとを聞いて頂き、園児はやっとの思いでメダカの家を完成することが出来ました。今では、元気に泳ぐメダカを優しい眼差しで見て、園児は大いに盛り上がっています。

たてわり班活動と高学年の成長 町立磯長小学校

町立磯長小学校では、各学年の担任が児童の様子をふまえ、学年目標を決め、つけたい非認知能力は何かを考えました。例えば6年生では、学年目標を決めるに当たり、磯長小学校を引っ張るリーダーとして、多くの場面で活躍して他学年の見本となって欲しいと言う思いで「BIG HERO 6」としました。

プール清掃や学習発表会の準備で楽器運びなど、各行事の際には裏方としての手伝いが多くありましたが、みんなが気持ちよく活動できる様に率先して行いました。そして、運動会や委員会では、6年生になったらこんなことができるという、見本となる演技や行動を見せ、仲間と協働することで多くの人に感動を届けることができました。

委員会活動では、学校を過ごしやすくする活動を沢山行いました。朝の当番の仕事などを毎回忘れずに頑張る事は難しいことですが、6年生として責任をもって取り組み、頼りになる6年生になりました。

一方、全校でのたてわり班の取り組みを令和5年度から取り入れました。

令和4年度までのペア学年の取り組みから、全学年の児童が一つの班にいて、自然と6年生がリーダーになるようにしました。しかし、一つの班は18～19人程の人数がいるので、2～3人の6年生だけでなく、4・5年生も自然と年下の学年の子を見ていかないといけないようにしました。そして、班のメンバーがお互いを受け入れ、協働するようにしないといけないことを伝えて活動を始めました。以下のような活動を各学期に行いました。

1学期：顔合わせと児童会行事 2学期：なかよし二上遠足

3学期：長縄跳び交流

また、各学期に1回のなかよし遊び(昼休みに班で遊ぶ)を行いました。なかよし遊びの前に高学年がどんな遊びをどういった目的とするのか考える機会を設けるなど、目的を持って活動をするようにしました。

それら取り組みの結果、休み時間には他学年の児童と一緒にドッジボールをする場面も以前よりも多く見られるようになりました。今後もこの活動を続け、縦のつながりから、自分の学年以外の仲間のことをもっと知る機会が増えると嬉しいです。

◆問合せ 教育総務課 ☎98-5533

